
チェーン

トマト男爵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

チェーン

【Nコード】

N5566D

【作者名】

トマト男爵

【あらすじ】

一人の救急隊員が全ての『鎖』を目撃する。犠牲者たちを繋ぐ『鎖』の輪は、一体何なのか――？

事故現場：始まりの惨劇（前書き）

大変に間が空きました。構想に苦勞して、ようやく踏み出しました。はい、前の作品をご存知の方には、この始まりは唐突ではないかと思いますが。遅筆になりそうですが、お付き合いしていただければ嬉しいです。

事故現場：始まりの惨劇

「トラックに挟まれた！？おいおい、生きてるのかよ、そいつ！？」
全く、とんでもないな…今日は異常としか言い様が無い。朝から
変なメールはくるし、『厄日』というやつなのかな…？

「…で、場所は？」

——北二丁目交差点？何か記憶にあるが…思い出せないな……？

「おい、早くしろ！かなりヤバいみたいだぞ！！」

同僚に促され、慌てて救急車に乗り込む。現場には、数分後には
着く筈だ。

「ヤバいどころじゃないぞ…急げ！！」

隊長が叫ぶ。現場は確かにひどいモノだった。交差点の真ん中で、
二台のトラックに挟まれた人が、弱々しく手を動かしている。生き
ているのが奇跡としか言い様が無い。

「くそつ、何とかコイツが動けば…！」

隊長がそう叫んで、トラックの運転席のドアをこじ開ける。運転
手は軽傷だが、気を失っていた。

「おい、誰か手を貸してくれ！」

直ぐに一人の隊員が隊長の手助けに入る。ぐったりしている大
柄な男性が引きずり出され、隊長がトラックを下げようとエンジン
をかけた。その刹那――

…ドオオオン！！

隊長の乗ったトラックは爆音と共に爆炎に包まれた。その光景は

「メールの画像と同じじゃないか……」

——そう、今朝受信した薄気味悪いメールの添付画像そのものだっ
た……

茫然自失しかけたが、そこはやはり仕事柄、直ぐに被害状況を確認
する。

トラックは、『一台だけが丸焦げ』だった。もう一台と、挟まれた人には、全く炎どころか、爆風すら触れていないようだった——まるで、隊長だけを狙っていたかのように——

「隊長、隊長……!?」

ムダだとはわかっていた。だけど、そう簡単に感情は抑えられない。助かっていて欲しい……今ほど、『奇跡』というものに期待した事は無かった——

「う……」

微かな、本当に微かな呻き声が聞こえた。そう、『奇跡』が、起きた——!

「おいっ、まだ隊長が……」

だが、救援を呼ぶ私の声は隊長の手によって遮られた。

「……………」

隊長が何かを言っている——繰り返し、繰り返し……何だろう?

「隊長、何ですか? しっかりして下さい!」

隊長の口が微かに動き、小さな声が、耳に届いた。そして、隊長は息絶えた……私の後ろでは、挟まれた患者の救出が続いている。直ぐにでも、手助けに行くべきなのだろう、だが、私の心は、隊長の最期の言葉に支配され、身体は硬直してしまった。隊長の最期の言葉、それは——

「鎖が、始まる……」

鎖? 一体、隊長は何を言いたかったのだろうか……?

半ば茫然自失していた私の耳に、仲間の声が届いた。

「……隊長は? おい、隊長はどうなんだ!?」

私はその声で我に返った……急いで隊長の死亡を確認する。やはり、もうこと切れていた……

「……だめだ。もう……」

仲間も、それは判っていたようだった。無言で頷き合った後、隊長の亡骸運び出す。後の処理は警察の仕事だ。私たちは、先に生存者を搬送する為に、救急車に乗り込んだ。急がねばならない。私

は頭の中からあの言葉を消し、患者の応急措置を始めた――

事故現場：始まりの惨劇（後書き）

過去の作品をご存知の方には、もうお分かりかと……そうです。『彼女』がまた動き始めました。これが最後の物語になる予定です。どれ程の惨劇になるか、私にも分かりません（笑）今暫くのお付き合い、宜しくお願いいたします。

救急車内へ定められた『傍観者』（前書き）

仕事に追われて、更新が遅くなりました。 m () m 新たな惨劇が始まります。

救急車内へ定められた『傍観者』

救急車の中に、異様な緊張感が張り詰めている。患者は瀕死の重傷で、左側の肺は潰れ、右足の膝から下は半ば千切れかけている。

取り敢えず止血と酸素の供給をしつつ、常備している氷で足の切断面を包む。運が良ければ、何とか繋がるだろう…妙に鼓動だけがしっかりしているのが、逆に気に懸かる。

「助かるか…？」

仲間の一人が呟き、もう一人の仲間が答える。

「普通なら、とつくに圧死しているのに…よほど運がいいのか、逆に運悪く死ねなかったのか……」

確かに、あり得ない状態だった。あれで生きているのが、まず奇跡だ。だが…私は、隊長の言葉を思い出していた。

『鎖が…始まる——』

もしも、もしもだ。この『奇跡』が、“鎖”の始まりだとしたら

根拠の無い不安に駆られながら、出血を見つけた私は、後部の奥にあるガーゼを取ろうと移動した。

『オマエヲ、傍観者ニ定メル。鎖ノ全てヲ見届ケヨ』

静かな、そして重い声が、私の耳に、いや、頭全体に響いた。直接に頭蓋骨に叩きつけられたようなその声は、私の動きを止めるには十分すぎた。その刹那…

『何ッ……………！？』

激しい衝撃、宙に舞う身体。激し過ぎて、逆に耳に入らない轟音…そして、一瞬とも永遠ともつかない『無』が私を包みこむ。

『患者を、患者を守らなくては…患者は何処——』そこで、私の意識は『無』に飲み込まれた——

どれ程の時間が流れたのだろうか…？様々な薬品の混じり合った異様な空気が視界を歪ませ、血の匂いと重なる死臭が鼻腔を刺す。

（此処は……？）

記憶が戻るのに、時間はかからなかった。私は先ず、被害状況を確認しようと辺りを見回した。私以外の生存者は……？

「青木！神田！竹嶋！」

私は、乗っていた仲間の名前を呼んだ。…少し時を置いて、もう一度名前を呼ぶ……返事は無い。

助かったのは私だけか…そう思っていた私の耳に、微かな呻き声が聞こえた。空耳かと思い、もう一度耳を澄ますと、やはり呻き声がする。

私以外に生存者がいる！長くは保たないかもしれないが、今の私には、唯一残された希望だった。

「……何処だ？」

私は呻き声の出所を捜した。それは、意外にも私のすぐ近くだった。そして、その生存者に気づいた瞬間に、私は背中に冷水をかけられたような錯覚を覚えた。

生存者は、瀕死のふちにある患者だった。所々にかすり傷を負っているものの、普通に横たわっている。

「大丈夫ですかっ！？」

声をかけた時、私はもう一つの『異変』に気付いた。脚が、千切れた脚が、繋がっていた――

恐怖に支配された私は、震えながら助けを待った。暫くして、何台かの救急車の音が近づいてきた。そこで、私の意識は再び薄れていった――

救急車内へ定められた『傍観者』（後書き）

次はもっと早く書けるように頑張ります。お付き合い下さいました方々に感謝です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5566d/>

チェーン

2010年10月17日03時59分発行